

即興演奏を用いた障害者の社会参加に関する研究

【代表者】

沼田里衣 大阪市立大学 都市研究プラザ テニユアトラック特任准教授

【共同研究者】

上野智子 和歌山大学 教育学部 准教授

菅道子 和歌山大学 教育学部 教授

山崎由可里 和歌山大学 教育学部 教授

【研究概要（申請書より抜粋）】

本研究は、即興音楽を用いたコミュニティ活動における研究と、特別支援学校における音楽プログラム開発の研究を融合させ、学齢期以降の障害者を対象とした異年齢プログラムにおけるインクルーシブな音楽活動の開発を目的とするものである。昨今、少子化による児童生徒数の減少にもかかわらず特別支援教育を必要とする児童生徒数の増加傾向にあり、教師と教師以外の専門家との連携協力が求められている。一方で、学齢期を終えた障害者の社会参加の問題は、地域生活・職業・文化活動などの様々な場面で課題も多く、昨年の相模原障害者施設殺傷事件とそれに対する社会の反応などは記憶に新しい。こうした状況から、障害の有無や年齢の差異に関わらずに個々の知性、感性、創造性を生かして取り組める音楽プログラムを開発することは、低年齢の障害者やその家族に未来への見通しを提供し、障害のない者にとっても豊かな共生社会の道筋を示すために重要であり、成熟した福祉社会に向けた新たな文化活動の在り方を見出すことに繋がると考えられる。

具体的なプログラム開発に向けては、絵本、図形楽譜、ゲームを使った方法が音楽教育や音楽療法の領域においては蓄積され始めており、代表者、分担者それぞれが実践研究において成果を出し始めている。代表者は、音楽療法をベースとしたコミュニティにおける即興演奏に関する研究を専門とし、図形楽譜を用いた手法についても検討してきた。特に、障害の有無を問わない即興表現集団「おとあそび工房」における実践研究からは、芸術形態と社会的課題の関連が明らかになりつつある。また、分担者は音楽療法の手法を特別支援教育に応用する研究を行ってきており、特別支援学級、特別支援学校での音楽プログラムの実施や絵本を使った研究成果を既に発表している。本研究は、これらの個々の知見を統合し、具体的なプログラム開発を行うことを目的とする。なお、研究代表者と分担者3名は本研究に向けて既にやりとりを初めており、連携の体制は整っている。

【研究成果（報告書より抜粋）】

本共同研究の最大の成果は、即興音楽を用いたコミュニティ活動における研究と、特別支援学校における音楽プログラム開発の研究を融合させ、学齢期以降の障害者を対象とした異年齢プログラムにおけるインクルーシブな音楽活動の開発を行なった点である。昨今、少子化による児童生徒数の減少にもかかわらず特別支援教育を必要とする児童生徒数の増加傾向にあり、教師と教師以外の専門家との連携協力が求められている。こうした状況にあって、本研究の特色は、障害の有無や年齢の差異に関わらずに個々の知性、感性、創造性を生かして取り組める音楽プログラムを開発した点にあり、低年齢の障害者やその家族に未来への見通しを提供し、障害のない者にとっても豊かな共生社会の道筋を示し、成熟した福祉社会に向けた新たな文化活動の在り方を見出すために重要な意味を持つものである。

具体的なプログラム開発に向けては、代表の沼田が蓄積してきた障害者やアーティストを含む地域の様々な人のリソースを用いて音楽活動を展開する方法と、和歌山大学音楽教育研究室が小・中学校に通う障害児を対象に蓄積した方法論をそれぞれ検討し、小学生以上の障害の有無を問わない2回のワークショップとして成果を発表した。その内容とは、多様な参加者が安心して表現を通じた交流ができるように、即興的要素を段階的、場面に応じて使用するものであり、絵を描く活動、絵を即興演奏の指揮のように用いる活動、わらべうたなどの既成曲や簡単なゲームを使った活動、映像によって音のイメージを喚起する活動、体の動きを使った活動から成るものであった。アンケート分析からは、参加者の生き生きとした主体性の確保に重点を置いた場合、活動の枠組みの設定方法が重要である点が明確に浮かび上がった。また、教育関係者、地域のアーティストと連携しつつ、参加者の多様性を確保した上での継続したコミュニティ活動に向けては、引き続き関係性を構築していく必要があり、今後の課題である。

こうした内容とともに、音楽教育関連の学会誌に発表するための理論的考察については、端緒についたところであるが、本年度は、各々が関連する学会や研究集会にて、成果発表を行った。代表の沼田は、音楽療法やコミュニティ音楽療法の議論を参照した上で、社会包摂型の芸術活動においては、そのテーマに見合う音楽形態を創出していくことが重要であることを、第1回共創学会年次大会で『社会』を聴くということー音楽と社会のコミュニケーション』というタイトルで発表した。また、共生型の芸術活動における美的価値観の問題について、文部科学省科学技術人材育成費補助事業『ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）』平成29年度ダイバーシティ研究環境実現 キックオフシンポジウム』において、「動いている音楽：障害者の社会参加に向けた即興音楽活動に関する研究』というタイトルで発表した。

研究業績 ※助成期間中に本研究課題を基に発表した著書、学術論文、学会発表、報告書等		
著書名/論文名/発表タイトル 等	発表年	出版社名/掲載雑誌名/学会名等
沼田里衣／「社会」を聴くということー音楽と社会のコミュニケーション	2017年12月 10日	第1回共創学会年次大会
沼田里衣／動いている音楽：障害者の社会参加に向けた即興音楽活動に関する研究	2018年2月 20日	ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）平成29年度ダイバーシティ研究環境実現 キックオフシンポジウム

その他 ※特許、産学官連携、受賞、メディア取材など特筆すべき事項
<p><新聞掲載> 2018年3月18日 読売新聞朝刊「子どもら20人 音楽や絵で交流」</p> <p>2018年3月22日 わかやま新報「音や絵で自由に表現楽しむ 和大ワークに60人」 http://www.wakayamashimpo.co.jp/2018/03/20180322_78045.html</p>